

和・漢・洋 「ことわざ辞典」

苦しい経験している渦中においては「このことは決して忘れない」と肝に銘じ、今後自分が反省すべきこと、改めるべきことなども真摯に考えたりするものです。しかし、過ぎてしまえばそんな謙虚な気持ちはどこへやら、苦境の最中に援助の手を差し伸べてもらったこともケロリと忘れ、また元の暮らしに逆戻り…、などということはないでしょうか。

【ことわざの例】

・日本／「喉元過ぎれば熱さを忘れ

る」(熱いものも飲み下してしまえば、熱かったこともすぐに忘れてしまうように、昔の苦労や受けた恩義も、時が過ぎれば忘れてしまう)

・中国／①「魚を得て筓(うえ/うけ)を忘る」(魚がとれば、役に立った筓のことは忘れてしまうように、目的を達してしまつと、助けになってくれたものや人のことはつい忘れてしまう)

※筓…竹を筒状に編んだ漁具のこと。

②「かさぶたが取れば痛みを忘れる」(傷跡が癒えれば痛かったことを忘れてしまうように、辛かったことから教訓を得ずに、また同じ過ちを犯してしまう)

・西洋／「The danger past and God forgotten.」(危険が去れば神は忘れられる)

※日本には「苦しい時の神頼み」ということわざもあります。

(注：本欄でご紹介することわざには、他にも類するものがある場合もあります。また、日本のことわざには中国の故事に由来するものもあります)



仏事の豆知識

枯山水

一般に日本庭園といえば、水を満たした池や樹木を配した情景を思い浮かべます。一方「枯山水(かれさんすい)」は、水を一切用いず、主に砂と石によって風景を表現する庭園様式をいいます。この「枯山水」を初めてお寺につくったのは、鎌倉時代末期から室町時代初期の禅僧・夢窓疎石



だともいわれ、この様式は禅宗寺院を中心に発展します。

禅の修行は、静寂に包まれた奥深い自然のなかで行うのが理想です。しかしながら、やむなく市中の禅院内を修行の場とする場合、瞑想の環境を

整えるためにも、幽玄の世界を象徴的に表現する庭が求められ、そのための作庭手法も工夫されるようになったのです。たとえば、私たちが「枯山水」を觀賞する場合も、白砂の波紋は、静かな水面や広大な雲海に見えることもあるでしょうし、配された石に、壮大な宇宙を感じとることもあるかもしれません。

「枯山水」は京都の龍安寺や東福寺、大徳寺などが有名ですが、どの庭園も深い趣があり、砂と石による独特の世界を垣間見ることが出来ます。

生活の中の仏教語

刹那

「先のことなんてどうでもいいんだ。今このときが楽しければそれでいいじゃないか!」という若者に対し、先輩が「君の考え方は随分刹那的だな」と感想を述べる場合があります。

一般に「刹那」は「きわめて短い時間、一瞬」を意味し、「刹那主義」

といえ、後先のことを考えずに目先の享楽を優先する、きわめて短絡的な思考をいう場合が多いようです。このように、俗世間で「刹那的・刹那主義」といえば、どちらかといえば否定的に用いられるのに対し、仏教語としての「刹那」には、深い思想が籠められているようです。

仏教でいう「刹那」は、「時間の最小単位」を意味するサンスクリット語の「クシャナ」を音写したもので、『大毘婆沙論(だいびばしゃろん)』(小乗仏教教理の集大成書)によれば、「1

刹那」は75分の1秒に当たるといいます。そして、この1刹那のうちに万物の生滅があり、仏教の無常というのは、寸時も止むことのないこの刹那の連続にあるということです。



暮らしに役立つ情報紙

よつば

- 暮らしの知恵袋…洗濯の基礎知識 —シミ抜き(応用編)—
- 仏事のころえ…仏足石とは
- 和・漢・洋…「ことわざ辞典」
- 仏事の豆知識…枯山水
- 生活の中の仏教語…刹那

2020年 秋彼岸号

— 明治22年創業の信用と実績 —

墓石・採石・生コン・建設業・不動産取引業



森近石材有限公司

〒720-0311

福山市沼隈町草深2564-2

TEL (084) 987-2133(代)

TEL (084) 987-2934(夜)

TEL (084) 987-2820(展示場)

FAX (084) 987-2714

歳時記

新酒

酒は「天の美禄」ともいいます。天から賜ったすばらしい俸禄(お給料)だということです。加えて「新酒」となると、酒好きにとっては待ちに待った年に一度の「天からのボーナス」ともいえそうです。

「新酒」は秋?

昔は、新米の収穫後、秋の気配が残っているうちに、各農家が自家用の酒を醸造したということもあり、「新酒」といえば「秋」、「歳時記」でも「新酒」は「秋季」に分類されています。

しかし、現在では酒造りは寒造りが主になり、新米で造った「新酒」が市場に出回るのは2月頃ですので、「新酒」から「秋」を連想することはむずかしいかもしれません。

「新酒」の味

ちなみに、江戸時代のはじめ頃、酒は造られる時季により、5つの種類に分けられていたといわれています。

- ①新酒(彼岸酒) …秋彼岸過ぎから仕込む
- ②間酒…10～11月に仕込む
- ③寒前酒…11～12月に仕込む
- ④寒酒…1月に仕込む
- ⑤春酒…2～3月に仕込む



正徳3年(1713)に刊行された江戸時代の俳諧歳時記『滑稽雑談(こっけいぞうだん)』にも、次のような記述があります。

「新酒、秋月に新穀すでに成り、これを醸し、旬を経ずしてこれを酌む。その性、淡薄にして、その気烈しく、ただ頭面に酔を発す…」

この当時の「新酒」は、「寒酒」のように熟成が十分に進んでいなかったため、味もまろやかではなく、酔いがすぐに頭にきて、醒めるのもはやかったようです。

「新酒」を詠む

「新酒」は、「新走り」「早稲酒」「今年酒」などとも表記されるとおり、味よりも「初もの」あるいは「走りもの」として好まれたようです。このことは今も昔もあまり変わらないかもしれません。

夏目漱石は「新酒」を季語に次のような句を詠んでいます。

- ・ある時は新酒に酔うて悔多き
 - ・憂あり新酒の酔に托すべく
 - また、小林一茶は次のような微笑ましい句を残しています。
 - ・八兵衛が破顔微笑やことし酒
- 「新酒」を口にすると「八兵衛さん」のしあわせそうな笑顔が浮かんでくるようです。

洗濯の基礎知識

シミ抜き(応用編)

「ぜったい落ちない!もう着られない!」うっかりつけてしまった衣類のシミを眺めながら、後悔したり、がっかりしたりした経験はどなたにもあるのではないのでしょうか。

今回は、よくある“困ったシミ”の対処法をご紹介します。



用意するもの

- ・布(タオルなど)
- ・シミ抜き棒……市販のものもありますが、手作りする場合は、割り箸の先に脱脂綿をはさみ、ガーゼなどの白い布で包んで輪ゴムで留めます。
- ・ベンジン……油性のシミに効果があります。
- ・消毒用エタノール……アルコール性のシミや臭い取りに効果的です。
- ・固形せっけん/台所用中性洗剤……頑固なシミに用います。



なかなか落ちないシミ

どんなシミも、つけてから時間が経つと落ちにくくなります。シミをそのまま放置することは極力避けるようにしましょう。

①カレーのシミ

➔油性のなかでも厄介なシミで、ベンジンでも落ちにくいものです。そこで、「シミ抜き棒」に薄めた「台所用中性洗剤」(水1カップに約10滴)を含ませ、下に敷いた「当て布」にシミが移るまで根気よくトントン叩きます。

シミが取れたら、仕上げに、ぬるま湯に浸してかたく絞った「タオル」でやさしく叩くように拭き、洗剤をしっかりと取り除きます。

注意: カレーの香辛料がアルカリ成分に反応し、シミが赤く変色することがありますので「固形せっけん」は使用しません。

②赤ワインのシミ

➔「シミ抜き棒」に水を含ませ、「当て布」にシミが移るまでトントン叩きます。シミが残っている場合には「固形せっけん」を塗って1~2分置き、再び水を含ませた「シミ抜き棒」で叩くようにします。エタノールは揮発性が高いので自然に蒸発し、仕上げ拭きをする必要はありません。

* ビールなどをこぼした場合も、消毒用エタノールで拭けば、いやな臭いもすっきり落ちます。

③チョコレートのシミ

➔薄めた「台所用中性洗剤」(前出)を「シミ抜き棒」に含ませて叩き、仕上げに、かたく絞った「タオル」で全体を叩くようにして洗剤を除きます。あとに色が残った場合、白い



衣類は塩素系漂白剤で、色ものの衣類は酸素系漂白剤で漂白します。

④口紅・ファンデーションのシミ

➔シミのついた表面に「当て布」をし、ベンジンを含ませた「シミ抜き棒」で「裏」からやさしく叩き、シミを布に移すようにして落とします。輪ジミ防止のため、最後に別のきれいな布にベンジンを含ませ、シミの中心から外側に向かってほかすよう叩き拭きをします。

なお、高価な衣類や繊細な生地などのシミ抜きは、専門店で依頼することをおすすめします。

ご存知ですか?

—「油性」か「水性」かシミの種類がわからないときは—

まずベンジンをシミ部分に垂らしてみましょ。それでシミが少しゆるんだようになれば「油性」のシミです。ベンジンに反応しない場合は「水性」のシミです。



仏事のころえ

「仏足石」とは

たとえば、自分が敬愛していた方が亡くなった場合、その方を偲び、その方を身近に感じることでできる何か“形あるもの”があればと願うことはないでしょうか。お釈迦さまの足跡を刻んだ石「仏足石(ぶつそくせき)」は、人びとのそのような思いから生まれたといえるのかもしれない。



「仏足石」のはじまり

お釈迦さまが入滅された当時、古代インドには仏像をつくって拝む習慣はなく、そもそもお釈迦さまそのものを形にすること自体、畏れ多いと考えられていました。ですから、お釈迦さまの遺徳を拝する対象は、その樹の下で悟りを開いたとされる菩提樹や、仏舎利(お釈迦さまの遺骨)を納めた塔などしかありませんでした。

しかし、お釈迦さまの入滅に際し、25年間も侍者として仕えた十大弟子の一人・阿難尊者をはじめ、多くの人びとがあまりに深く悲しむのを傍で見ている人たちが、お釈迦さまをいつまでも身近に感じることでできるものはないかと考え、ひたすら歩いて教

広められたお釈迦さまの足跡(歩いた後に残る足の形)を石に写したことが、

後の「仏足石」のはじまりだとも伝えられます。

お釈迦さまの遺徳を表す

時代を経るにつれて「仏足石」に刻まれる内容も変化していきます。当初のような、お釈迦さまの足跡だけでなく、お釈迦さまの生涯や生まれる以前の物語など、お釈迦さまを象徴的に表現した内容が刻印されるように

なっていったのです。

その理由の一つとして、まだ文字が一般庶民に普及していなかった当時、人びとにお釈迦さまの教えや生涯をわかりやすく伝えるためだったともいわれます。

日本に伝えられた「仏足石」

日本に「仏足石」が伝わったのは8世紀半ばのことです。

7世紀の半ばに中国の使者がインドに赴いた際、お釈迦さまが初めて教えを説いたとされる鹿野苑にあった「仏足石」を転写して帰国します。その後、遣唐使に随行した日本の留学僧・黄文本実が長安の寺でその「仏足石」を転写し、日本に持ち帰った後、奈良平城京の寺院に伝えられた

のだといひます。

現在、日本全国にある「仏足石」は120ほどで、最古のものは「天平勝宝5年」(753)と側面に刻銘された奈良・薬師寺にあるものです。その他各地にある「仏足石」の多くは戦後に造られたもので、古いものでも、江戸時代中期以降のものだといわれます。

刻まれた相好

お釈迦さまのお身体にそなわっている立派な特徴を「相好(そうごう)」(「相」は大きな特徴、「好」は小さな特徴の意)といい、お釈迦さまには32の相、つまり“三十二相”が数えられるといわれています。

「仏足石」には、この三十二相のうち、手足に現れているとされる「七相」

が刻まれているといひます。

奈良・薬師寺に伝えられる「仏足石」にも「七相」が刻まれ、両足裏の中央に刻まれた車輪のような文様の「千輻輪相(せんぷくりんそう)」は、お釈迦さまがインド各地を巡りながら教えを説いて歩かれたことを、象徴的に表したものだとも伝えられます。



仏足石

*宗旨・宗派や地域によって異なる場合があります。